

# 王日殿御返事

弘安三年

五九歳

弁<sup>べん</sup>の房<sup>ぶん</sup>の便宜<sup>びんぎ</sup>に三百文、今度二百文給び了んぬ。仏は真に尊くして物によらず。昔の得勝<sup>とくしょう</sup>童子<sup>どうし</sup>は沙<sup>いさご</sup>の餅<sup>もちい</sup>を仏に供養し奉りて、阿育大王<sup>あいうだいおう</sup>と生まれて一閻浮提<sup>えんぶだい</sup>の主たりき。貧女<sup>びんにょ</sup>の我がか<sup>か</sup>しら<sup>しら</sup>をおろして油と成せしが、須弥山<sup>しゅみせん</sup>を吹きぬきし風も此の火<sup>か</sup>をけさず。されば此の二三の驚目<sup>おどろめ</sup>は、日本国<sup>にっぽんこく</sup>を知る人の国を寄せ、七宝<sup>しっぽう</sup>の塔<sup>とう</sup>を忉利天<sup>とうりてん</sup>にくみあげたらんにも<sup>勝</sup>もすぐるべし。法華經の一字は大地の如し、万物を出生す。一字は大海の如し、衆流を納む。一字は日月の如し、四天下をてらす。此の一字返じて月となる、月變じて仏となる、稻は變じて苗となる、苗は變じて草となる、草變じて米となる、米變じて人となる、人變じて仏となる、女人變じて妙の一字となる、妙の一字變じて台上の釈迦仏となるべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。恐々謹言。

日 蓮 花 押

王 日 殿